

『集量論』 I 9 解釈の問題点 ——ディグナーガとジネーンドラブッディ——

片 岡 啓

問題の所在 ディグナーガが PS I 8cd-10¹⁾ で取り上げる「量と量果」の問題は²⁾、戸崎 [1963] [1979] [1985] により注釈者ダルマキールティの立場が既に明らかにされている³⁾。ダルマキールティの枠組みがジネーンドラブッディに継承されることも戸崎 [1979:46] の指摘の通りである。このことは 2005 年に出版された PST 校訂本の apparatus にエディターが付した引用文献類からも確認できる⁴⁾。そこでは PST の多くのパッセージが PV を受けたものであることが丹念に跡付けられている⁵⁾。達意的に注釈していく PV と異なり、ジネーンドラブッディは逐語的に PS(V) を注釈する。同時にダルマキールティの理解を PS(V) の中に読み取る。結果としてディグナーガの本文とのズレが浮き彫りになることがある。それは畢竟ディグナーガとダルマキールティの理解の差である。ジネーンドラブッディの場合、PS(V) 本文に即して注釈していくため、その差異が眼に見え易いという利点がある。

ディグナーガは PS I 9a において「あるいはここ（知覚）で自己認識が結果である」（*svasamvittiḥ phalaṃ vātra*）と宣言し、自己認識（*svasamvitti*）を結果とする立場がオプションとしてありうることを明らかにする。注釈者ダルマキールティの理解に沿って従来、経量部に二説を認めながら、次のような解釈がなされてきた⁶⁾。

		認識手段	結果
I 8cd	経量部 ₁	対象の現れを持つこと	外界対象認識
I 9ab-cd	経量部 ₂	対象の現れを持つこと	自己認識
I 9ab, 10	唯識	把握主体の形象	自己認識

PS I 9a の *vā* で結ばれる「(A) あるいは (B)」の A に相当するのは、「あるいは」が含意するように「自己認識を結果としない」見解であり、ヴァスバンドゥが『俱舍論』I 42 で示す見解を受けて PS I 8cd で念頭に置かれる経量部₁の立場、すなわち、外界対象認識を結果とする立場である。いっぽう B に相当するのは経量部₂と唯識に共通する立場、すなわち「自己認識を結果と認める」立場である。

ジネーンドラブッディもこのようなディグナーガ解釈を示す。しかし自己認識を結果とする経量部説をディグナーガ自身は認めていたのか。本稿では、まず経量部₂を PS(V) I 9 に読み込むのが適当かを検討した上で、ディグナーガにおいて経量部に二説（経量部₁と経量部₂）を立てるのが適切かを検討する。

PS(V) I 9 和訳 ディグナーガの PS I 9 および自注 PSV の直訳をまず示す⁷⁾。

I 9a: あるいはここで自己認識が結果である。

なぜなら認識は二つの現れを持つ——それ自身の現れをもつ、また、対象の現れをもつ——からである。二つの現れを持つその「認識」の自己認識が結果である。なぜか。

I 9b: なぜなら対象の確定はそれに「従った」形を持つからである。

なぜならば、対象を伴った認識が対象である場合、自己認識に従った形で、対象を「望ましい」あるいは「望ましくない」と理解するからである。いっぽう (tu), 外界のものに他ならない対象が認識対象である場合には

I 9c⁸⁾: これが〈対象の現れを持つこと〉が認識手段である。

なぜならその場合、認識によって自己認識されるにもかかわらず、「認識」それ自体については考慮することなく、これ（認識）が〈[外界] 対象の現れを持つこと〉のみが認識手段となるからである。なぜならば、その対象が

I 9d: それによって認識されるからである。

なぜならば、X や Y という形で——善・不善などとして——対象の形象が認識内に入り込むと、その同じ X や Y という形で、その対象が認識されるからである。

PS(V) I 9 の構成 すぐに看取されるように、詩節の分節に沿って全体の構成は四つに分かれる。

PS(V) I 9a: 自己認識が結果である

PS(V) I 9b: 理由説明：自己認識に従って相分が理解されるから

PS(V) I 9c: 対象の現れを持つことが認識手段である

PS(V) I 9d: 理由説明：それによって外界対象が認識されるから

また下線部の tu に明らかなように、二つの立場が対比されていることが分かる。「対象を伴った認識が対象である」(saviṣayaṃ jñānam arthaḥ) 場合と「外界のものに他ならない対象が認識対象である」(bāhya evārthaḥ prameyaḥ) 場合とである。単純に言えば、内的なものが対象である場合と外的なものが対象である場合である。この対立を素直に受け取るならば、二つのケースは、唯識と経量部の立場に言及するものと考えられる。それぞれの立場の説明も、認識内の相分を対象とする場合と、外界対象を対象とする場合という、唯識と経量部の対立を明確化したものとするのが最も自然である。自己認識を結果とする立場と、自己認識ではなく外界対象認識を結果とする立場とである。

PS(V) I 9ab 唯識 対象を伴った認識が対象である場合 (自己認識が結果)

PS(V) I 9cd 経量部 外界対象が認識対象である場合 (外界対象認識が結果)

しかしダルマキールティを受けたジネーンドラブッディの解釈は異なる。彼によれば、前半は経量部₂と唯識に共通する立場であり⁹⁾、後半は、その両者の中でも経量部₂に関する但し書きと解釈される。つまり tu で結ばれ、内と外の対立を描くかに見えた PS I 9ab と I 9cd は等しく経量部₂を説明しようというのである。ジネーンドラブッディは、唯識と同じく経量部においても見分である把握主体の形象 (grāhakākāra) が認識手段とされるのではないかという反論を予想した上で、それを否定する形で「いっぽう外界対象が認識対象である [経量部の] 場合には、自己認識を結果として立てるが、認識が〈対象の現れを持つこと〉が認識手段として認められるのであって、唯識のように把握主体の形象が [認識手段として立てられるわけ] ではない」(PST 71.15-72.2) とディグナーガが述べたと注釈する (cf. PV III 346)。

PS(V) I 9ab 唯識 + 経量部₂ 対象を伴った認識が対象である場合

PS(V) I 9cd 経量部₂ 外界対象が認識対象である場合

このジネーンドラブッディの解釈は明らかに不自然である。というのも、この解釈に従えば、ディグナーガは同じ経量部₂の見解を tu で対立させた上に、対立する二つの説明を与えたことになるからである。すなわち、経量部においては、内的なものが対象であり、かつ、外的なものが対象である、ということになってしまう。この不具合に気づいていたからであろう、ジネーンドラブッディは、「対象を伴った認識が対象である」(saṁsāraṃ jñānam arthaḥ) について無理な解釈を行う。すなわち彼によれば、saṁsāraṃ というのは jñānam にかかるバフヴリーヒではなく、「対象とともに」(saha viṣayaṇa) という不変化辞 (avyayībhāva) と解釈される。すなわち「対象 [が認識対象である場合] とともに、認識が認識対象である場合」と理解される。「認識手段の対象として、[楽などといった] 認識に依拠する場合だけでなく……[青などの] 対象に依拠する場合も [自己認識が結果である]」(PST 71.9-11) と解釈されるのである¹⁰⁾。経量部においても、もちろん楽などの認識それ自体の自己認識を認めている。しかし「あるいは自己認識が結果である」という場合の自己認識とは、そのような内的な認識に限られるわけではない。青などの外界対象の認識についても「自己認識が結果である」といえるというのである (PST 71.1ff)。このような解釈を図ることで前半と後半の対立は解消する。すなわち、いずれにおいても、青などの対象が認識対象である場合が問題とされている

と解釈することが可能である。

PS(V) I 9ab 唯識 + 経量部₂ 認識や対象が認識対象である場合

PS(V) I 9cd 経量部₂ 外界対象が認識対象である場合

しかしディグナーガのサンスクリット原文を見ると、この解釈がおよそ不自然であるのは明白である。

PSV I 9ab yadā hi saviṣayam jñānam arthaḥ

PSV I 9cd yadā tu bāhya evārthaḥ prameyaḥ

bāhya eva という限定から明らかなように、ここでは内と外が対比されているのであり、ジネーンドラブッディの解釈は明らかに二次的な解釈である。saviṣayam を「対象を伴った [認識]」ではなく「対象とともに」と解釈し、全体を「認識の場合と同様、[青などの] 対象を認識対象とする場合」と理解し直すジネーンドラブッディの解釈は、経量部₂の立場を PS I 9 に通底するものとして読み込むという欲求に動機づけられたものと考えられる。

I 9d 解釈の問題点 PS I 9a の「あるいは自己認識が結果である」とする立場に経量部₂を読み込もうとするジネーンドラブッディの解釈が不自然であることを確認した。ディグナーガの原意において、I 9ab と I 9cd の対立は、唯識 + 経量部₂と経量部₂の対比ではなく、単純に唯識と経量部の対立と捉えるのが自然である。次に取り上げるのは、I 8cd の経量部₁と I 9cd の経量部₂という区別をディグナーガが認めていたかどうか、という問題である。ジネーンドラブッディは、「A あるいは B」の A に相当する経量部₁においては（外界）対象理解 (arthādhigati, viṣayasamvitti) が結果となり、B の経量部₂においては自己認識が結果として立てられると、ディグナーガの発言を理解していた。

		認識手段	結果
PS(V) I 8cd	経量部 ₁	対象の現れを持つこと	対象理解
PS(V) I 9ab-cd	経量部 ₂	対象の現れを持つこと	自己認識

認識手段についてはディグナーガが I 9c で述べるように「対象の現れを持つことが認識手段」である。ジネーンドラブッディにとって都合が悪いのは PS(V) I 9d: yasmāt so 'rthaḥ **tena mīyate** (なぜならその対象は、それ (対象の現れを持つことという認識手段) によって認識されるからである) である。I 9c において「対象の現れを持つこと」が認識手段となることを宣言した後、ディグナーガは I 9d において、その理由として〈対象の現れを持つこと〉(viṣayābhāsātā) を手段として対象認識があることを挙げる。ここにあるのは「対象の現れを持つこと」と「対象認識」の

(110)

『集量論』19 解釈の問題点 (片岡)

因果関係、手段結果関係である(量→果: *viṣayābhāsātā* → *artho miyate*)。ここでディグナーガは認識結果が「対象認識」であると明言している。もしジネーンドラブッディのいうように、I 9d が経量部₂についての説明であるならば、ここは「自己認識」が結果とされるべきである。ジネーンドラブッディは、この問題に気がついている。そして、この不都合を逃れるために手の込んだ解釈を施す。それは大略次のようなものである (PST 72.10-73.10)。

まず *artho miyate* が、対象認識 (*arthasaṃvid*) を第一義的に指すことはジネーンドラブッディも認めている。しかし、ここでディグナーガが意図しているのは対象認識の結果としての対象確定 (*arthaniścaya*) であるとジネーンドラブッディは解釈する (PST 72.10: *miyata iti niścīyate*)。すなわち、対象認識と対象確定との間にある因果関係を通じた転義的用法 (*upacāra*) によって *miyate* は *niścīyate* を指示する。結果として「対象の現れを持つことによって対象が確定される」というのがディグナーガの言わんとしたこととなるというのである(量→果: *viṣayābhāsātā* → *artho niścīyate*)。また「自己認識が結果である」という I 9a の発言は、ジネーンドラブッディによれば「[対象認識は] 勝義的には [自己認識を] 本質とするので自己認識が結果だと述べた」 (PST 73.9: *paramārthatas tādātmyāt svasaṃvittih phalam uktam*) のである (cf. PV 350bcd)。I 9d では転義的に「対象認識が結果である」と述べることで、認識手段である〈対象の現れを持つこと〉と結果である対象認識 (→対象確定) とが同じ外界対象に向かっており、「認識手段と結果とが向かう対象にズレがない」 (PST 73.7: *pramāṇaphalayor viṣayabhedo na bhavati*) ということが明らかにされているというのである (cf. PV 350a)。これがディグナーガが勝義的な立場からではなく、転義的な用法を用いてまで「対象認識が結果である」と発言した意図であるとジネーンドラブッディは結論付ける。

以上のジネーンドラブッディの解釈は無理に無理を重ねたものである。まず *artho miyate* という I 9d の発言は、ジネーンドラブッディも認めているように、言葉の第一義として「対象認識」が結果であることを明言するものであり、これを転義的用法と解釈する必要はない。あえて転義的用法と取ったとしても、「対象確定が結果である」との発言となり、これは I 9a の「自己認識が結果である」との発言と矛盾することになる。この矛盾を解消するためにジネーンドラブッディは、さらに「勝義的には」「転義的用法では」という区分を持ち出して「だから矛盾しない」 (PST 73.10: *ity aviruddham*) と強弁する。いずれも経量部₁と別に経量部₂を立てようとすることから生じた無理である。最初から「対象認識が結

果である」とI9dの発言を第一義で、経量部₁の立場で解釈すれば何の問題も起こらない。しかも yadā tu bāhya evārthaḥ prameyaḥ という I9cd の導入句も自然に解釈できるのである。すなわちディグナーガにおいて経量部₁と別に経量部₂を立てる必要はないとするのが PS(V) 本文に即した自然な解釈である。

ディグナーガの前提とする手段・結果の二説 以上を踏まえると、ディグナーガの本意として次のような解釈の可能性が考えられる。

	認識手段	結果
I8cd, I9cd	経量部 対象の現れを持つこと	外界対象認識
I9ab, I10	唯識 把握主体の形象	自己認識

ディグナーガは経量部に二説を認めていない。I9aの vā は、経量部にたいして唯識の立場では「あるいは自己認識が結果である」との意である。そしてI9cの tu で対比的に示されたのは唯識に対して「自己認識を結果としない」経量部の立場である。この文脈で問題とされる経量部における認識結果はI9dで明らかにされるように自己認識ではなく対象認識である¹¹⁾。これはI8cdで念頭に置かれていた経量部と同じものである。I9cd 導入句の yadā tu bāhya evārthaḥ prameyaḥ もこれを支持する。ジネーンドラブッディはダルマキールティに沿ってI9に自己認識を結果とする経量部₂の立場を読み込もうとした。これはディグナーガの原文に照らして無理がある。そしてその無理を承知しており、ディグナーガの原意とのズレを知っていたからこそ、ジネーンドラブッディは不都合なディグナーガの発言にたいして懇切丁寧な再解釈を施したと思われる。すなわちジネーンドラブッディは確信犯的にダルマキールティに沿ってディグナーガを読み替えたと考えられる。ジネーンドラブッディの注釈の破れが、ディグナーガの本意がどこにあるのかを示唆している。

1) PS(V) : *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter 1*. Ed. E. Steinkellner (http://ikga.oeaw.ac.at/Mat/dignaga_PS_1.pdf) .

2) 「量と量果」および「自己認識」に関する最近の研究として村上徳樹 [2008] 「rang rig pa に関するケドゥップジェの解釈」(日本西藏学会々報 54,17-31), 小林久泰 [2009] 「認識結果としての自己認識」(日本西藏学会々報 55,121-130), Shinya Moriyama [2008] “The Status of Self-awareness in the Sautrāntika Epistemology” (第15回 IABS 発表資料) がある。先行研究に関してはそこに挙げられる文献表を参照されたい。

3) 戸崎宏正 [1968] 「佛教論理學説と経量部説 (5)」(印仏研 33, 70-73), 戸崎宏正 [1979] [1985] 『仏教認識論の研究』上・下 (東京: 大東出版社)。

4) PST: *Jinendrabuddhi's Viśālāmālavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā, Chapter 1, Part I*. Ed. E.

(112) 『集量論』I9 解釈の問題点 (片岡)

Steinkellner, H. Krasser, H. Lasic, Austrian Academy of Sciences Press, 2005.

5) PV: *Pramāṇavārttika* は戸崎 [1979] [1985] に準拠する。

6) 戸崎 [1968] [1979] [1985], M.Hattori [1968] *Dignāga, On Perception*. Cambridge: Harvard University Press.

7) Hattori [1968:28ff], 戸崎 [1985:1ff], 池田道浩 [1993:8] 「ケドゥプジェの量果の解釈について」(日本西藏学会々報 39, 8-13) による訳, および, 小林 [2009] によるテキスト訂正と和訳を参照した。

8) 厳密には I9cd であるが, 便宜的に I9c と呼ぶ。

9) 「外界実在論と外界否定論の [いずれにも共通するものとして], 同じ一つのストラでもって, [前とは異なる] 特定の結果の設定を為そうとしながら [ディグナーガは] 言う——「あるいはここで自己認識が結果である」と。前では対象の認識が結果だと述べられた。それゆえ「あるいは」という言葉は任意選択を意味する。」(PST 69.4-6)

10) 「対象とともに認識が」がいつのまにか「認識とともに対象が」とすり替えられていることにも注意されたい。

11) PS I 7ab に明らかなようにディグナーガは分別を含む全ての認識に自己認識を認めている。しかし PS(V) I 9cd で問題としているのは, 「認識によって自己認識されるにもかかわらず, [認識] それ自体については考慮することなく」とあるように, 対象認識の側面に関してである。

〈キーワード〉 ディグナーガ, ジネンドラブッディ, 『集量論』, 量果

(九州大学大学院准教授, 博士 (文学))

新刊紹介

高崎 直道

『高崎直道著作集 第3巻 —大乘仏教思想論 II—』

A5 版・520 頁・本体価格 9,500 円
春秋社・2009 年 1 月